

## V. 地域・公共マネジメントプログラム

### 1. 設置の趣旨と教育の目的

2000年4月に地方分権一括法が施行され、地方自治体は国から権限を委譲されるとともに自己管理・自己責任のもとに政策の立案・運営を求められることになりました。

また、東日本大震災や福島原発事故など複合的な災害に見舞われ、被災地を中心として多くの地域の人々の生活が脅かされている現状があります。

このような状況の中で、2014年には、「まち・ひと・しごと創生法」が成立し、少子高齢化への対応や東京圏への人口集中の是正を推進することが明示され、2018年の「改正地域再生法」では、企業の東京からの移転や市町村の商店街活性化、空き店舗活用の支援などが盛り込まれました。

しかし、それでもなお、それぞれの地域は、非常に複雑かつ多様化した様々な問題を抱えています。少子高齢化の進行と福祉、地場産業や商店街の衰退、地域の環境、治安、教育に関する問題、市町村合併や財政赤字の拡大、そして安全・安心な生活の場の喪失など公共的な重要課題が山積し、住民の不安・不満が高まっています。このような状況に対処するには、行政だけでなく、地域の人々も、「新しい公共」という考え方で、独自に創造的な戦略をもって取り組む素地ができつつあります。様々に複合する課題を抱えた地域を目の当たりにして、市民による健全なまちづくり・コミュニティづくりへの参画がますます高まっているのです。

このような状況のなか、地域社会において学際的かつ総合的な取り組みにより、多様な社会的課題の解決策を策定するなど、公共マネジメントの政策形成を担える有能な人材の養成が強く求められています。

これらの社会的要請を鑑み、それぞれの地域における諸問題に対して、学際的総合的にアプローチを進め、これを解決する高度な専門的解決能力を有する人材の養成を目的とした教育演習活動を本プログラムでは展開しております。2023年度は、プログラム全体イベント（サマースクール）として、長野県駒ヶ根市をケーススタディとし当地にてフィールドワークを実施のうえ、行政や地元の関係者との間で実地見聞と調査を行い、2023年12月9日にはオンラインにより駒ヶ根市の市長および市職員の方に向けて最終報告発表を行いました。

本プログラムでは、公務員志望の学生だけでなく、政界やNPOでの活動を通じて地域の社会問題に積極的に関与し、問題解決に取り組んでいきたいという志の高い学生、商店街や都市の建設・インフラ整備など民間企業においても都市計画・都市運営に積極的に関与したいなど地域問題に対して高い学習意識を持っている学生のニーズにも積極的に応えていきます。

## 2. 2023年度演習科目担当者および履修者数

連番	氏名	所属学部	FLP演習A	FLP演習B	FLP演習C	総計	実施形態
1	工藤 裕子	法	2	6	7	15	合併(A・B・C)
2	鳴子 博子	経済	1	2	4	7	合併(A・B)単独(C)
3	山崎 朗	経済	4	3	2	9	合併(A・B・C)
4	根本 忠宣	商	2	4	9	15	合併(A・B・C)
5	天田 城介	文	7	4	8	19	単独(A・B・C)
6	新原 道信	文	4	4	8	16	合併(A・B)単独(C)
7	川崎 一泰	総合政策	3	1	1	5	合併(A・B・C)
8	小林 勉	総合政策	2	3	5	10	単独(A・B・C)
9	堤 和通	総合政策	3	-	-	3	単独(A)
合 計			28	27	44	99	

## 3. プログラムスケジュール

- 4月 第1回部門授業担当者委員会
- 5月 第2回部門授業担当者委員会
- 7月 第3回部門授業担当者委員会  
ガイダンス（一年次生向け）
- 9月 学外活動（サマースクール・長野県駒ヶ根市）
- 11月 2024年度募集に伴う選考試験
- 12月 学内活動（期末成果報告会）  
第4回部門授業担当者委員会
- 2月 第5回部門授業担当者委員会
- 3月 FLP修了発表  
FLP修了証書授与

## 4. プログラムの活動

### サマースクール

- 実施日： 2023年9月4日(月)～9月6日(水)
- 実施都市： 長野県駒ヶ根市
- 実施場所： 駒ヶ根市役所・他
- 実施内容： 現地調査と政策提言（駒ヶ根市役所ならびに関連施設）

## サマースクール成果報告会・期末成果報告会

実施日： 2023年12月9日(土)

実施場所： 中央大学 多摩キャンパス 8304 教室

実施内容： サマースクール参加ゼミによる成果報告  
各ゼミによる年度活動報告

### 5. これまでの履修生の主な就職・進学先実績

法務省、総務省、財務省、農林水産省、厚生労働省、国土交通省、文部科学省、内閣府、特許庁、参議院事務局、衆議院事務局、国税庁、環境省、気象庁、原子力規制委員会、人事院、防衛省、東京国税局、地方裁判所、裁判所事務官、家庭裁判所、高等裁判所、警視庁、福島県警察本部、北海道庁、岩手県庁、福島県庁、茨城県庁、栃木県庁、群馬県庁、埼玉県庁、千葉県庁、東京都庁、神奈川県庁、新潟県庁、山梨県庁、長野県庁、岐阜県庁、静岡県庁、三重県庁、京都府庁、逗子市役所、八王子市役所、港区役所、日立市役所、葛飾区役所、君津市役所、国立市役所、板橋区役所、江東区役所、江戸川区役所、大田区役所、北区役所、渋谷区役所、千代田区役所、練馬区役所、港区役所、特別区人事・厚生事務組合、調布市役所、小平市役所、多摩市役所、昭島市役所、羽村市役所、町田市役所、三鷹市役所、武蔵野市役所、渋川市役所、さいたま市役所、蕨市役所、川崎市役所、小田原市役所、相模原市役所、横浜市役所、秦野市役所、藤沢市役所、宇都宮市役所、韮崎市役所、笛吹市役所、松本市役所、名古屋市役所、鈴鹿市役所、堺市役所、神戸市役所、大分市役所、大村市役所、荒川区役所、杉並区役所、品川区役所、墨田区役所、都市再生機構、中小企業基盤整備機構、日本電気、日本原子力発電、東京電力ホールディングス、四国電力、沖縄電力、日本原燃、日本銀行、みずほフィナンシャルグループ、岩手銀行、北越銀行、山梨中央銀行、ゆうちょ銀行、日本政策金融公庫、りそなホールディングス、三井住友銀行、清水銀行、大垣共立銀行、三菱 UFJ 信託銀行、組合中央金庫、多摩信用金庫、横浜信用金庫、西武信用金庫、明治安田生命、SMBC 日興証券、かんぽ生命保険、明治安田生命保険相互会社、あいおいニッセイ同和損害保険、三井住友海上火災保険、全国市町村職員共済組合連合会、日本総合研究所、ベネッセコーポレーション、マイナビ、明治乳業、鈴与、日立パワーソリューションズ、伊藤忠丸紅鉄鋼、本田技研工業、住友化学、大日本住友製薬、ヤンマー、ダイキン工業、NISSHA、キャンノンマーケティングジャパン、NECソリューションイノベータ、インテリジェンス、プロフェッショナルバンク、東急エージェンシー、電通九州、東急コミュニティー、東日本旅客鉄道(JR 東日本)、日本航空(JAL)、京成電鉄、西日本鉄道、舞浜リゾートライン、イトーヨーカ堂、セブン-イレブン・ジャパン、東急ストア、日本マクドナルド、大日本印刷、トッパンフोटマスク、KOA、富士ソフト、三菱電機、山九、デロイトトーマツコンサルティング、アビームコンサルティング、トランス・コスモス、積水ハウス、東京建物、三井不動産レジデンシャル、近鉄不動産、NTT コミュニケーションズ、クロスキャット、NTT 都市開発、UR コミュニティ、東日本電信電話(NTT 東日本)、デル・テクノロジーズ(De11)、デジタルハリウッド、日本生活協同組合連合会、東京都国民健康保険団体連合会、日本放送協会、東京都福祉保健財団、(学)立教学院、(国)東京大学、東京都公立大学法人、東北大学公共政策大学院、慶應義塾大学法学研究科、学校法人和光学園、東京大学新領域創成科学研究科社会文化環境学専攻、東京大学大学院法学政治学研究科、早稲田大学大学院法務研究科、一橋大学大学院、北海道大学大学院、中央大学大学院(法学研究科、文学研究科、公共政策研究科)、エディンバラ大学大学院など

## 6. 演習教育活動

### (1) 工藤 裕子 (法学部・教授)

#### FLP演習A・B・C

##### <テーマ>

地域資源を活かした地域経営を考える：そのための地域資源の再発見・再評価、マネジメント

##### <授業の概要>

少子高齢化や地方分権化の中でさまざまな問題に直面している地域経営について、その地域に特有の資源（人材、財源、歴史文化、政治、地勢など）をいかに再発見し、再評価するか、さらにそれらをいかにマネジメントするか、を世界、特に大陸ヨーロッパ諸国の事例および日本の事例を通じて検討、考察する。地域経営の問題点について、文献およびフィールド調査で整理、理解したうえ、主に関係者へのヒアリングを通して日本のベストプラクティスを分析し、また海外事例の収集、調査を行う。過疎地域の再生事例として、中部イタリアの中山間都市にてワークショップ、研修を行うことを演習の一環とする他、日本の地方自治体でのフィールド調査も実施する。事例として扱うのは主に、諸資源が限定されている中小都市であり、大都市あるいは大都市圏における戦略等は対象としない。

##### <活動内容>

演習Aは、春学期前半に社会科学の調査方法、プレゼンテーションの仕方、レポートの書き方等を学んだ。社会科学の調査方法としては、国内実態調査（静岡県掛川市）を5月末に現地において実施するのにあわせ、事前学習、事後の質疑のやり取りなどを経て、春学期末に政策提言のグループ・プレゼンテーションを実施し、掛川市および関係機関にフィードバックを行った。調査および政策提言のプレゼンに基づく個人レポートは、夏季課題とした。また並行して、サマースクールに向けての事前調査、情報収集と課題の特定、仮説の構築などを実施し、サマースクールの準備を進めた。

秋学期は、サマースクールのヒアリングに基づく調査研究および期末報告会でのプレゼンテーションの準備を行った。秋学期後半はまた、文献調査と座学により海外実態調査の準備を行った。そして春休み（2月25日～3月8日）に海外実態調査（イタリア、エミリア＝ロマーニャ州）を現地にて実施した。

演習Bについては、春学期は前年度末春休み中に実施したイタリア研修の報告書作成の作業および各人の関心テーマを踏まえた卒論テーマの選定を中心に個人研究発表と討論を進めた。春学期の後半はまた、夏季休業中から秋学期はじめにかけて実施する演習Bによる国内実態調査の準備を行った。演習A時に実施した海外実態調査を踏まえ、それぞれが関心を持つテーマを持ち寄り、演習B全体として調査するテーマの決定、訪問先の選定、訪問先機関との調整などを進め、夏季休業中から秋学期前半にかけて国内実態調査を実施した。

秋学期後半には、この研究成果をゼミで発表したうえ、卒論のテーマを選定し、個人による研究発表を行った。そのうえで、A生時の海外実態調査の報告、国内実態調査の報告、各人の研究テーマについてのレポートを含むB生の一年間の活動記録をまとめた報告書を作成した。

演習Cについては、春学期にそれぞれの卒論のテーマを最終決定したうえ、執筆計画を作成、夏休みから秋学期にかけて論文を執筆、完成させたうえ、卒業論文集を編集した。今年度は、グリーン・ツーリズム、食のまちづくり、シビックプライド、MaaS、災害発生時の避難所、再生可能エネルギーと地域活性化、をテーマにした卒業論文・卒業制作が完成した。

また、本来であればA生時に現地にて実施する海外実態調査（イタリア、エミリア＝ロマーニャ州）がコロナの影響でA生時はオンライン実施となったため、本年度はC生も海外実態調査に参加した。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：A

実施日：2023年7月8日(土)～2023年7月9日(日)

実施都市：静岡県掛川市

実施場所：掛川市役所・他

実施内容：掛川市の産業・まちづくり、観光交流、『学び旅』、お茶を中心とした農業振興、『どうする家康』を活用した歴史観光（VR、ARの活用）、災害対策・危機管理、移住・定住政策とシティ・プロモーション、子育て支援・高齢者支援、公私協働についてのヒアリングおよび調査

成果：掛川市の産業・まちづくり、観光交流、『学び旅』、お茶を中心とした農業振興、『どうする家康』を活用した歴史観光（VR、ARの活用）、災害対策・危機管理、移住・定住政策とシティ・プロモーション、子育て支援・高齢者支援、行政と市民との協働のあり方、企業の役割などを学んだ他、市役所の関係者、コミュニティ活動に従事している人々、企業等へのヒアリングを通して、調査とヒアリングを中心とする社会調査の方法を学んだ。また、事前調査、事後のフォローアップの方法、そしてそれらを政策提言としてまとめ、プレゼンテーションおよびレポートにまとめる、という一連の作業の進め方についてマスターした。プレゼンテーションはテーマ別グループで実施し、レポートは夏季休業中の課題として個人で作成した。

対象演習：A

実施日：2023年7月8日(土)

講演者：山崎 善久氏（ローカルライフスタイル研究会）

演題：掛川におけるスローライフ活動とローカルライフスタイル研究会の役割

実施都市：静岡県掛川市

実施施設：掛川市内

実施内容：掛川市のこれまでのスローライフ活動の経緯および歴史、行政との関係、ローカルライフスタイル研究会が果たしてきた役割などについて、市内の関係箇所を巡りながら解説していただいた。

成果：掛川市のスローライフ活動について、特に市民の視点を学ぶことができたほか、公私協働の具体的な活動やプロジェクトの内容を学ぶことで、行政と市民との協力関係の可能性を知ることができた。

対象演習：A

実施日：2023年7月8日(土)

講演者：佐藤 雄一氏（ローカルライフスタイル研究会・互産互生機構・コンセプト株式会社）

演題：学び旅のつくり方（+ローカルライフスタイル研究会のまちづくりへの参加）

実施都市：静岡県掛川市

実施施設：掛川市役所および市内

実施内容：コンセプト株式会社代表でローカルライフスタイル研究会メンバーの佐藤氏からは、市役所とともにローカルライフスタイル研究会および特に氏が取り組んできた「学び旅」について、そのコンセプトおよびつくり方を解説していただいた。「学び旅」はFLP 工藤ゼミが掛川市内で実施してきたような研修の旅であり、掛川市は全国の多くの大学のさまざまなゼミの活動に協力し、テーマに沿った見学先やヒアリング先の発掘、講師の派遣などのコーディネート、ロジスティックなどのノウハウを蓄積してきており、それらをカタログ化しているが、その中からいくつかの具体的なプラン等についてお話していただいた。

成果：掛川市と地元のNPO団体を構成する市民とが推進する「学び旅」を知ることで、

新しいコト消費の旅のあり方、またそのために掛川において具体的にどのようなアクターがどのような協力関係を築いてきたのか、などについても学ぶことができた。

対象演習：A

実施日：2023年7月8日(土)

講演者：山本 和子 氏 (掛川おかみさん会)

演題：掛川市の商店街活性化とおかみさん会の活動

実施都市：静岡県掛川市

実施施設：掛川市内

実施内容：商店街の活性化における市民の活動について、掛川おかみさん会の会長として長年さまざまなプロジェクトに関わってこられた山本氏より、おかみさん会の活動、行政との協働、アートを中心としたさまざまな活動などについて、市内の関係箇所を巡りながら解説していただいた。

成果：掛川市内の商店街の活性化について、行政の政策のみならず、市民の参画によるさまざまなプロジェクトとその成果を学ぶことができたほか、行政とおかみさん会の協力関係によって実現したイベントや施設などを紹介していただくことで、公私協働の課題や可能性について知ることができた。

対象演習：B

実施日：2023年9月4日(月)～2023年9月6日(水)

実施都市：大分県由布市

実施場所：由布市役所・他

実施内容：当該調査を実施した各人のテーマに基づいたヒアリング

成果：各人が卒業論文のテーマとして発展させるべきテーマをそれぞれ模索し、またその情報、データを収集した。

対象演習：B

実施日：2023年9月10日(日)～2023年9月12日(火)

実施都市：福岡県福岡市

実施場所：SEED ホールディングスよかまちみらいプロジェクト推進事業部・他

実施内容：当該調査を実施した各人のテーマに基づいたヒアリング

成果：各人が卒業論文のテーマとして発展させるべきテーマをそれぞれ模索し、またその情報、データを収集した。

対象演習：B

実施日：2023年9月19日(火)～2023年9月20日(水)

実施都市：宮城県仙台市

実施場所：仙台市役所・他

実施内容：当該調査を実施した各人のテーマに基づいたヒアリング

成果：各人が卒業論文のテーマとして発展させるべきテーマをそれぞれ模索し、またその情報、データを収集した。

対象演習：C

実施日：2023年12月26日(火)

実施都市：東京都杉並区

実施場所：杉並区役所

実施内容：卒業論文の作成にあたって必要なインタビューの実施

成果：インタビューの結果は卒業論文に有効に活用された。

対象演習：A・C

実施日：2024年2月25日(日)～2024年3月8日(金)

実施都市：エミリア＝ロマーニャ州・他（イタリア）

実施場所：ファッジオーリ農場・他

実施内容：EUのプロジェクト等でもよく知られるアグリツーリズム農場であるファッジオーリ農場を拠点とし、小規模自治体および私企業、大学、組合等の活動が活発なエミリア＝ロマーニャ地域の地域振興政策について、地方自治体（市長、副市長および担当評議員）、州政府（担当事務官）、地域振興に関係する組合や公社、および企業家へのヒアリングを通じて、調査した。

成果：海外の地方自治体の首長や評議員、企業家にヒアリング、インタビューを行い、本格的な調査が実施できた。特に、日本では限界集落と呼ばれるような地域においても、地産地消、観光、アグリツーリズム、スローフードなどによって活性化することが可能であることを知ることができた。地域振興政策に関連し、イタリアの商業活動および観光政策について複数の市役所に対してヒアリングを行ったほか、移住促進政策を含む諸政策による地域振興およびコミュニティの活性化、ロマーニャ地域を襲った2023年の大雨・洪水・土砂崩れの経験を踏まえた災害対策および災害復興についても、複数の市役所等に対してヒアリングを行った。地元企業、組合組織、団体などを訪れヒアリングを行ったほか、伝統産業や農業のブランド化などを実施している企業や個人に対してもヒアリングを行うことができ、それぞれのアクターの熱量を実際に肌で感じることもできた。

A生は、各自の卒論テーマに向けてさまざまなインプットを得ることができたそれぞれ、いろいろな感慨や学びがあった。

C生は、A生時にオンラインで実施したヒアリング先と一部は同じヒアリング先に行くことで、オンラインでは得られなかった現場感覚を得ることができたのみならず、当時とは異なるヒアリング先やテーマが加わったことで新たな学びにもなった。

対象演習：A・C

実施日：2024年2月28日(水)

講演者：Fausto Faggioli氏（Fattorie Faggioli創始者）

演題：EUおよびイタリアにおける農場・農村政策の歴史・現在・未来

実施都市：チヴィテッラ・ディ・ロマーニャ市（イタリア）

実施施設：ファッジオーリ農場 ボルゴ・バジーノ

実施内容：EUのモデル・ケースとされるファッジオーリ農場を1982年に創業、イタリアのアグリツーリズム法の制定にも大きく貢献、以来、EUのさまざまな農業振興・農村活性化等のプロジェクト・マネージャとして活躍する一方、近年ではボローニャ大学、ヴェネツィア大学、ボッコーニ商科大学などで後進の指導を中心に活動されている講演者より、イタリアのアグリツーリズムについて、歴史やこれまでの主要プロジェクトを振り返りつつ、コロナ禍で多くの産業が疲弊する中、むしろ活気を呈したアグリツーリズムおよび農業・農村の可能性についてお話いただいた。また、ケース・ストーリーとしてファッジオーリ農場の成り立ちや現状についても詳しく解説していただいた。

成果：A生については、農場を拠点にした一週間の調査活動を開始するにあたり、調査対象の一つを今一度確認することで、問題意識を深めることに役立った。C生については、A生時にはオンラインにて実施した海外実態調査地の現況を理解する貴重な機会となった。

対象演習：A・C

実施日：2024年3月2日(土)

講演者：Francesca Faggioli 氏 (Faggioli Experience 代表)

演題：ファッジオーリ農場の考える持続可能な農泊とは

実施都市：チヴィテッラ・ディ・ロマーニャ市 (イタリア)

実施施設：ファッジオーリ農場 ボルゴ・バジーノ

実施内容：ファッジオーリ農場の創始者を継いで同農場の共同代表として活動する傍ら、同農場で受け入れる研修の企画、コーディネート、デジタル・サポートを実施する Faggioli Experience をパンデミック禍に立ち上げ、その代表を務める講演者のこれまでの活動について、特にパンデミック中に始めたデジタル配信活動やその後のコト消費に焦点を当てた観光の作り方を中心にお話いただいた。さらに、地元の食の伝統とスローフードについてお話しいただいたうえ、同地に生まれたペッレグリーノ・アルトゥージが著した『厨房の学とよい食の術』の中からいくつかのレシピについて解説していただきつつ、調理実習をしていただいた。

成果：情報発信および広報活動の重要性、デジタル・ツールの活用の方法、そしてコト消費の具体的なあり方、体験学習の重要性などを学ぶ機会となった。また、予習していたいくつかのレシピについて実際に調理し、自分で試食するという貴重な体験になった。

特にC生については、A生時にはオンラインにて実施した海外実態調査において画面越しだった調理実習を実際に体験する機会となった。

## (2) 鳴子 博子 (経済学部・教授)

### FLP演習A・B

#### <テーマ>

ジェンダー関係(横軸)と世代間関係(縦軸)から社会の中で人はいかに働き、暮らし、生きるかを考える

#### <授業の概要>

私たちは本当に自分らしく働き、暮らし、生きてゆくことができるのだろうか。個人・家族・社会(職場・地域)の関係を問題の根源に遡って考え、現代の日本社会に生きる一人一人のこれからの働き方、暮らし方、生き方を具体的に模索するのが本ゼミの目的である。働き方改革、少子化対策、介護・医療問題への対応、それらのどれもが現代日本の喫緊の課題であることを多く的人是認しているが、男女やそれ以外の多様な性の在り方を縛る見えない力が作用しており、さまざまな問題の根は、実は一つに繋がっているのではなからうか。セクシュアル・マイノリティへの差別解消が叫ばれる一方、女性の社会進出がそれなりに進んでいるにもかかわらず、数十年間も選択的夫婦別姓の導入が実現しないのが現代日本の現実である。

欧米の思想・理論・政策に学ぶことの多かったこれまでの知は、人間と社会の横軸(水平・平等関係)に重点を置き、縦軸(垂直・世代間関係)を思考することが少なかった。それゆえ、本ゼミでは時間配分を考えながら、労働政策、家族・社会政策、世話労働論など縦横両軸に関わる知見を欧米の理論・政策を参照点として相対化しつつ学ぶことを心掛ける。ゲストスピーカーをお招きして学ぶ機会も設ける。そうした学びの中から具体的な研究テーマ、フィールドを選んで、実態調査を準備、実行する。サマースクールを中心にした一年の活動の締めくくりとして期末成果報告会で発表し、サマースクール報告書を作成する。

#### <活動内容>

2023年度はA生・B生を茗荷谷キャンパスにて合併授業とし、メンバーの少なさ(A生1名・B生2名)をカバーすべく、適宜、二学年が協力し合って研究活動を進めた。

#### 【A生】

A生の村上はるかさんは、長野県駒ヶ根市におけるサマースクールの事前準備の過程で、当初は、調査研究のテーマを「女性が出産後も安心して働き続けるために必要な保育環境整備、子育て支援政策」としようと考えていた。しかし、駒ヶ根市に関する情報収集を進める中で、市がかなり多くの子育て支援政策をすでに実施していることがわかってきた。そこで保育以外のテーマも候補に入れて検討を重ねた結果、最終的に「若者誘致による街の発展」というテーマを選択するに至り、市が人口減少に陥らないために、若者を誘致する方策を模索することとなった。このような問題意識から、市外の若者に長期の休みに市内に滞在してもらい、市を知り、その魅力を発見するイベントを開催する構想を練った。「サマースクール in 駒ヶ根市」では、駒ヶ根市役所の寺平氏、駒ヶ根テラス代表の浦野氏にヒアリングを行い、サマースクール後の追加調査では、JA上伊那南部営農センターの山本氏から回答をいただいた。12月の期末成果報告会では、これらの調査研究の成果を踏まえて、①「ごまを使用した商品開発」イベント、②「シャッターアート」イベントという若者誘致のための二つのイベント開催の提言を行った。

#### 【B生】

- ① 「サマースクール in 長野県駒ヶ根市」への参加
- ② 白門祭(11月3日～6日)への参加
- ③ 11月25日(土)の「映画鑑賞会」イベントの開催
- ④ 2月25日(日)大学コンソーシアム八王子「学生企画事業補助金 成果報告会」報告「もっと知りたいLGBT! in 多摩キャンパス」

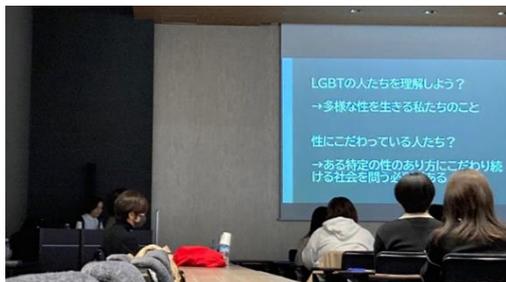
⑤3月21日(木)白門「学生活動スタートアップ」支援金 活動報告会

B生の高岡董さんと山口真緒さんは、昨年度、「性的マイノリティを含むすべての若者が過ごしやすい街づくり」を研究テーマに選び、「サマースクール in 八王子市」でのヒアリングの結果、八王子市には LGBT に対する理解が充分とは言えない市民も存在していること、他市と比較すると LGBT に関する政策が少ないことを把握、「大学生が主体となって、八王子市の後援のもと LGBT の啓発イベントを行う」という政策提言を行った。このような昨年度の活動に基づき、今年度は実際に政策提言を自ら実行に移すこととなった。幸いにも大学コンソーシアム八王子「学生企画事業補助金」に採択され、また学員会の白門「学生活動スタートアップ」支援金もいただくことができた。

- ①サマースクールに同行し、A生の調査をバックアップするとともに、駒ヶ根市のLGBT支援について市役所職員にお話を伺った。
- ②白門祭に参加して多摩キャンパス5号館教室にて、LGBT啓発活動の一環として、関連書籍を展示するとともに来場者と対話し、映画鑑賞会の周知にも努めた。
- ③11月25日(土)13:00~16:00に中央大学多摩キャンパスグローバル館7階多目的ホールにて、特別授業・映画上映・ワーク(個人ワークと意見共有)を内容とするイベント「八王子市×中央大学 映画鑑賞会」を開催した。東京都立大学の杉田真衣先生に特別授業(講演)をしていただき、映画『カラコエの花』を鑑賞し、個々の参加者に映画について個人ワークをしてもらったうえで、参加者が意見共有をするワークを行った。中大生のみならず、八王子市内の他大学の学生や地域住民の方を含む30人の参加者を得て、意見交換や対話を行うことができた。
- ④2月25日(日)は、令和5年度学生企画事業補助金採択団体となった9団体が学園都市センター12階イベントホールにて、13:30~17:00過ぎまで、口頭発表とポスターセッションを行い、鳴子ゼミは5番目に登壇、「もっと知りたいLGBT! in多摩キャンパス」を発表した。
- ⑤3月21日(木)に、オンライン開催の白門「学生活動スタートアップ」支援金 活動報告会にて「LGBTの若者が暮らしやすい大学・地域づくり」の活動報告を行った。



サマースクール(長野日報社・新聞掲載された写真)



杉田先生の特別講演(11月25日)



ワークの様子(11月25日)

## FLP演習C

### <テーマ>

ジェンダー関係(横軸)と世代間関係(縦軸)から社会の中で人はいかに働き、暮らし、生きるかを考える

### <授業の概要>

私たちは本当に自分らしく働き、暮らし、生きてゆくことができるのだろうか。個人・家族・社会(職場・地域)の関係を問題の根源に遡って考え、現代の日本社会に生きる一人一人のこれからの働き方、暮らし方、生き方を具体的に模索するのが本ゼミの目的である。働き方改革、少子化対策、介護・医療問題への対応、それらのどれもが現代日本の喫緊の課題であることを多くの人は認識しているが、男女やそれ以外の多様な性の在り方を縛る見えない力が作用しており、さまざまな問題の根は、実は一つに繋がっているのではなからうか。セクシュアル・マイノリティへの差別解消が叫ばれる一方、女性の社会進出がそれなりに進んでいるにもかかわらず、数十年間も選択的夫婦別姓の導入が実現しないのが現代日本の現実である。

欧米の思想・理論・政策に学ぶことの多かったこれまでの知は、人間と社会の横軸(水平・平等関係)に重点を置き、縦軸(垂直・世代間関係)を思考することが少なかった。それゆえ、本ゼミでは時間配分を考えながら、労働政策、家族・社会政策、世話労働論など縦横両軸に関わる知見を欧米の理論・政策を参照点として相対化しつつ学ぶことを心掛ける。ゲストスピーカーをお招きして学ぶ機会も設ける。そうした学びの中から具体的な研究テーマ、フィールドを選んで、実態調査を準備、実行する。最終学年として共同研究の総まとめとなる卒業論文(報告書)を完成させる。

### <活動内容>

2023年度、C生については多摩キャンパスにて単独授業を行った。

昨年度初頭に、C生4名のうち中村亜依香さんと和田彩果さんは2年間の研究テーマに「ライフコースとジェンダー」を選び、阿部瑞貴さんと松下舞羽さんは個々の興味関心に沿った個人研究を進めることを決定した。そこで、今年度の目標は昨年度から進めてきた研究成果を期末成果報告書にまとめることであった。

中村さんと和田さんの問題意識は、大学生はどのようなジェンダー意識のもとで自らのキャリアを選択しているのか、にある。そこで中央大学の文系学部の学生は、どのようなジェンダー意識のもとで卒業後の自らの職業や家族形成について考えているのかを調査、分析した。「中央大学文系学部生のキャリアとジェンダーに関する意識調査」(2022年12月15日～2023年1月31日、Googleフォームによるアンケート調査、回答者数137名)の結果を分析し、「大学生の仕事、結婚、子育てに対する意識とジェンダー観の関連性—中大生へのアンケート調査から—」をまとめた。

阿部さんは、女性が子どもを生み育てることと自身のキャリアの確立とを両立するにはどうしたらよいかという問題に強い関心を持っている。彼女は子どもを持つことにより労働所得が減少することを指すチャイルドペナルティーという言葉に出合い、公益財団法人21世紀職業財団と一般財団法人女性労働協会へのヒアリングを実施して問題の分析を進め、「チャイルドペナルティー問題から子供を持つ女性の労働の在り方を探る」をまとめた。

松下さんは、児童虐待問題の解決に強い問題意識を持っている。当初「面前DVといじめの傍観者」を研究テーマとしようと考えたが、最終的に、子どものSOSがどうすれば無下にされないかという点に着目して「児童虐待のSOS～子どもアドボケイトの是非子どもの意思表示 意見表明等支援員 アドボカシー制度の導入～」を研究テーマとして報告書を作成中である。

### (3) 山崎 朗 (経済学部・教授)

#### FLP演習A・B・C

##### <テーマ>

地域創生のデザインと地域イノベーション

##### <授業の概要>

2008年からは日本の人口は減少しています。2008年以前から人口減少している地域も少なくありません。東京都もまもなく人口減少に転じると予想されているなかで、地域をいかにデザインしていくのかが問われています。本ゼミでは、その観点から、地域イノベーション政策、産業クラスター、地域のグローバル化、地域のプレミアム化を取り上げます。

テキスト、参考文献をてがかりにしながら、地域のグローバル化について各自、関心のあつるテーマを設定し、自主的な研究を行います。また、全員でゼミ合宿に行きます。昨年度は北海道東川町で調査を実施しました。

ゼミ内における研究成果は、懸賞論文やプレゼン大会ビジネスコンテストなどへの応募という形で社会に公開していきます。

これまでに「創立130周年中央大学の未来～私の提言～ 最優秀学生賞」、「第59回みずほ学術振興財団懸賞論文佳作」、「第1回地球の歩き方総合研究所懸賞論文佳作」、「第61回みずほ学術振興財団懸賞論文三等<一等・二等は該当なし>」などの成果が出ています。

##### <活動内容>

山崎ゼミは、先進的な地域創生を実践している自治体を調査対象都市、調査・研究活動を行っています。近年はコロナ禍の影響もあり、フィールドワークが行えませんでした。昨年度は北海道の東川町において調査を実施しました。今年度は沖縄県の石垣島にキャンプ場およびワーケーション、テレワーク、離島農業についての調査を行いました。

C生の3年間の研究成果である多摩ニュータウンの公団住宅の活性化についての政策提言は、多摩まちづくり・ものづくりコンペティション2023の1次審査を通過し、2次のプレゼン大会に参加し、ビジネス部門のビジネス優秀賞および学術賞部門の奨励賞をダブル受賞しました。また、地方創生デザインアワード特別賞（飛島建設）も受賞しました。

B生の石垣島の離島農業についての調査結果を踏まえた論文は、クマイ化学工業第12回学生懸賞論文の特別賞を受賞しました。

##### <実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：A・B・C

実施日：2023年10月31日(火)～2023年11月2日(木)

実施都市：沖縄県石垣市

実施場所：石垣市役所・他

実施内容：キャンプ場、ワーケーション、テレワークセンター、離島農業の調査

成果：サマースクールの政策提言のアイデアおよび離島農業についての論文作成

対象演習：C

実施日：2023年11月25日(土)

実施都市：八王子市

実施場所：明星大学

実施内容：多摩まちづくり・ものづくりコンペティション2023の1次審査に通過し、2次のプレゼンに参加

成果：ビジネス賞部門のビジネス優秀賞および学術賞部門の奨励賞をダブル受賞  
委員会会長賞も併せて受賞

地方創生デザインアワード特別賞（飛島建設主催）

#### (4) 根本 忠宣 (商学部・教授)

##### FLP演習A・B・C

###### <テーマ>

- 【A生】 地域活性化の源泉を探る
- 【B生】 地域振興の意義と効果について考える
- 【C生】 地域に関する研究論文の作成

###### <授業の概要>

###### 【A生】

地域活性化という言葉が一人歩きしているが、そもそも地域が活性化するとは何か曖昧であり、立場によって想定する内容は異なっている。この点を明確にしたうえで、地域をどう活性化すべきなのかを徹底的に考える。その際、都市と地方、中心と周辺、グローバルな地域間競争という視点を考慮して地域の地理性や特性を踏まえた分析を念頭に置く。

具体的な分析に当たっては定住地としての地域、働く場としての地域、商業地としての地域、学びの場としての地域、観光地としての地域など評価すべき軸を明確にしたうえで、地域活性化の源泉が何かを特定する。

###### 【授業の内容】

###### ①文献解読

古典の輪読：ジェイコブズ『都市の原理』SD選書、『発展する地域、衰退する地域』ちくま学芸文庫

関連論文の解読：必要に応じて適宜紹介

その他参考文献：ウェストルンド・ハース編『ポストアーバン都市・地域論』ウェッジ

###### ②サマースクールへの参加と報告書の作成

###### ③地域活動への参加

静岡県伊東市における地域活性化のためのビジョン作成

静岡県宇佐美市における観光地活性化活動

相模原市橋本における商店街活性化活動

###### ④合宿を通じた地域視察

###### 【B生】

B生の大きな目標はゼミ交流会での報告です。ゼミ交流会は中央大学商学部本庄ゼミ、上智大学経営学部山田ゼミ、北海道大学経営学部相原ゼミ、大阪市立大学商学部山田ゼミ、西南学院大学経済学部西田ゼミが参加しており、学生に本格的な学術論文を作成してもらい、報告・討論してもらおう場です。6月に中間報告会、12月に最終報告会が予定されており、他大学との交流も含めた密度の濃い大会です。10本以上の報告がなされ、なかには大学院レベルの報告も含まれています。計量経済学、組織論、地場産業、経営学、金融論など専門の異なる教員（ゼミ）が交流することで様々な視点や分析手法があることを学ぶことができるのも大きな利点です。（各大学の教員は研究水準の高いメンバーばかりなので論文に対する評価はかなり厳しいです）また、教員と学生が採点することで論文の順位も決めますので適度な競争意識が働くことで参加者全員が真剣に取り組むような雰囲気が定着しています。ちなみに根本ゼミはコロナ前の大会では2年連続で優秀論文に選ばれています。（コロナ禍はオンライン開催で、順位づけは行わなかった）

また、A生との合同ゼミとなりますのでB生はチューターとしての役割を果たしてもらいます。報告や議論の仕方、サマースクールでの調査の進め方など適宜サポートをしてもらうことで、自分自身の不足も同時に補って下さい。

###### 【C生】

卒業論文の作成。卒業論文の作成指導を行います。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：B・C

実施日：2023年4月4日(火)

実施都市：静岡県伊東市

実施場所：宇佐美コミュニティセンター

実施内容：NPO 法人宇佐美城山・街づくりプロジェクトの定例会議への参加、また関連住民との打ち合わせ。

対象演習：B

実施日：2023年6月30日(金)～2023年7月2日(日)

実施都市：北海道札幌市

実施場所：北海道大学 札幌キャンパス

実施内容：他大学とのゼミ交流会に参加し、中間報告を行う。

対象演習：B・C

実施日：2023年8月3日(木)

実施都市：静岡県伊東市

実施場所：宇佐美コミュニティセンター

実施内容：NPO 法人宇佐美城山・街づくりプロジェクトの定例会議への参加、企画に向けた実地調査。

対象演習：A・B・C

実施日：2023年8月6日(日)

実施都市：静岡県伊東市

実施場所：宇佐美コミュニティセンター

実施内容：NPO 法人宇佐美城山・街づくりプロジェクトの定例会議への参加、企画に向けた実地調査。

対象演習：A・B・C

実施日：2023年9月14日(木)～2023年9月16日(土)

実施都市：岩手県盛岡市

実施場所：株式会社岩鑄・他

実施内容：研究発表の題材としている「伝統工芸品の海外進出」について、岩手県に赴き、伝統工芸品である南部鉄器の製造・販売を行っている記号へインタビュー調査を行う。また、公民連携の成功事例であるオガールベースを視察する。

対象演習：B・C

実施日：2023年10月19日(木)

実施都市：静岡県伊東市

実施場所：宇佐美コミュニティセンター

実施内容：NPO 法人宇佐美城山・街づくりプロジェクトの定例会議への参加、Web サイトに載せるインタビューを行う。

対象演習：B・C

実施日：2023年10月24日(火)

実施都市：静岡県伊東市

実施場所：宇佐美コミュニティセンター

実施内容：NPO 法人宇佐美城山・街づくりプロジェクトより運営を任されている宇佐美の地域紹介 Web サイト作成にあたり、現地でのインタビューを行う。

対象演習：B・C

実施日：2023年11月14日(火)

実施都市：静岡県伊東市

実施場所：宇佐美コミュニティセンター

実施内容：NPO 法人宇佐美城山・街づくりプロジェクトより運営を任されている Web サイトの取材およびアンケート企画の打ち合わせ。

対象演習：B・C

実施日：2023年12月5日(火)

実施都市：静岡県伊東市

実施場所：宇佐美コミュニティセンター

実施内容：NPO 法人宇佐美城山・街づくりプロジェクトより運営を任されている Web サイトの取材。

対象演習：B・C

実施日：2023年12月19日(火)

実施都市：静岡県伊東市

実施場所：宇佐美コミュニティセンター

実施内容：NPO 法人宇佐美城山・街づくりプロジェクトの会議への参加、企画に向けた実地調査。

## (5) 天田 城介 (文学部・教授)

### FLP演習A

#### <テーマ>

現代日本社会において人びとが生きていく場所としての地域を考える

#### <授業の概要>

現代日本社会において人びとが生きていくことが可能にする場所として、あるいはその逆に人びとが生きていく上での困難を生み出す場所として地域がある。その地域においていかなる社会的仕組み（家族、福祉、医療、教育、労働、社会運動、産業など）によって人びとが生き延びていくことが可能になったり、困難になっているのかを、インテンシヴなフィールドワークを通じて明らかにする。

演習Aでは、ゼミ生のそれぞれの問題関心を大事にしつつ、前期にサマースクールでの調査設計とフィールドワークの準備を行い、サマースクールではフィールドワークの実施・分析・考察・プレゼンテーションを遂行する。後期では、サマースクールのフィールドワークの追加調査を実施すると同時に、データ分析・データ解釈作業を行ったのち、期末成果報告会でのプレゼンテーション、最終報告書の作成を行う。また、可能であれば、都市郊外（八王子市・多摩市・日野市などのみならず、東京都・神奈川県・埼玉県・千葉県などを含む）へのインテンシヴなフィールドワークを実施する予定である。これらの調査を通じて徹底的に分析・考究していくことになる。

演習は当該地域のテーマに関する基本文献の講読と同時に、受講生の研究発表を中心に進める。報告者・司会者・討論者といった役割を毎回決めて、受講生による主体的なゼミ運営を行う。

#### <活動内容>

前期には、2023年9月4日(月)～6日(水)に実施予定の「中央大学FLP 地域・公共マネジメントプログラム2023年度 サマースクール in 駒ヶ根市」の準備のため、駒ヶ根市に関する先行研究をレビューしつつ、駒ヶ根市がまとめた各種行政資料や報告書などを渉猟した。こうした文献レビューと同時に、研究計画書の作成、質問項目の設定、インタビュー対象者の選定などを行い、リサーチデザインを確定していった。とりわけ、今年度のサマースクール調査の「問い」を「子育て支援が充実している長野県駒ヶ根市にあっても、なにゆえ子育ての社会化が進まないのか？」をテーマとし、当該テーマを「情報へのアクセスと選択の穴」「価値観の穴」の視点から解読するという形で調査を設計した。こうした調査設計のもとでより緻密かつダイナミックな調査を行うための準備を進めていった。幸いにも2023年5月より新型コロナウイルス感染症が5類感染症に引き下げられたことによって、コロナ禍のような制約を受けることなく調査を設計することができた。実際、2023年9月4日(月)～6日(水)に長野県駒ヶ根市を訪ね、一日目に駒ヶ根市役所企画振興課と子育て支援センターきっずらんど、2日目にはファミリーサポートぐりとぐら、駒ヶ根テレワークオフィス koto、駒ヶ根市役所総務課を訪問し、インタビュー調査を実施することができた。それらのデータを緻密に分析したのち、丁寧に考察を深め、具体的案政策提言をまとめた。そうした調査結果を3日目の調査報告会にて報告した。

上記調査の結果として、【1】他の自治体と比較して駒ヶ根市の子育て支援は充実しているものの、子育ての社会化が進めない理由として、ニーズにあった情報が提供できていないこと、本人が膨大な情報の取捨選択ができていないために支援に結びついていないこと、【2】慣習や価値観によって子育てがしにくい環境があること、とりわけ高齢世代の子育てに関する慣習や価値観とは異なるがゆえに子育て支援を利用しにくい状況があること、【3】そのためにも、①子育て世代に対してはデジタルソーシャルワークによる個人に即した情報提供を行うこと、②高齢世代などに対しては環境整備による行動変容を通じた価値観の受容促進などを行うことが必要であることを提示した。

上記の結果を12月9日(土)の期末成果報告会で報告したところ、幸いにも参加して下さった方々からも高い評価を得ることができ、大変実りある報告会となった。

年度末はFLP報告書の作成を行うと同時に、2024年度より本格的に実施する都市郊外(八王子市・多摩市・日野市などのみならず、東京都・神奈川県・埼玉県・千葉県などを含む)調査プロジェクトのフィールドワークを検討した。具体的には、都市郊外調査プロジェクトを当該自治体や支援団体と共同で進めながら、定期的に調査報告会を実施し、最終調査報告書として完成するための年間計画等を議論した。

全体としては、2023年5月より新型コロナウイルス感染症が5類感染症に引き下げられたことによって、コロナ禍のような制約を受けることなくインタビューを中心とする調査を実施することができ、大変充実したものとなった。また、学生たちは非常に熱心かつ緻密にインタビュー調査や質問票調査に取り組んでくれたため、きわめて実りのある一年になったと思う。2024年度に本格的な調査プロジェクト始動に向けた社会調査を行うことができたし、調査プロジェクト全体について学ぶこともできた。

#### <実態調査・見学調査・講演会>

2023年9月4日(月)~6日(水)に「中央大学FLP 地域・公共マネジメントプログラム2023年度 サマースクール in 駒ヶ根市」を実施した。

また、サマースクールの準備として、当初は8月下旬に講演会を予定していたが、講演者が体調不良となったため、延期せざるを得なくなった。

## FLP演習B

### <テーマ>

現代日本社会において人びとが生きていく場所としての地域を考える

### <授業の概要>

現代日本社会においてどのように人びとは生きていくことが可能にする場所として、あるいはその逆に人びとが生きていく上での困難を生み出す場所として地域がある。その地域においてどのような仕組み（家族、福祉、医療、教育、労働、社会運動、産業など）によって人びとが生き延びていくことを可能にしたり、困難にしたりしているのかを探求する。

演習B、演習Cでは、一年間を通じて都市郊外（八王子市・多摩市・日野市などのみならず、東京都・神奈川県・埼玉県・千葉県などを含む）をフィールドにインテンシヴなフィールドワークを実施すると同時に、春・夏・冬の3回、全国各地のフィールドワークを行うことを通じて比較検討をしていく。

### <活動内容>

2023年5月に新型コロナウイルス感染症が5類感染症に引き下げられたことから、対面授業はもちろんのこと、グループごとに定期的に調査を行い、コロナ禍前と同様、宿泊を伴うフィールドワークなどを計画できたのは大きな喜びであった（2022年度にも夏期フィールドワークは実施したが、様々な制約を余儀なくされた）。

しかしながら、8月16日（水）～18日（金）で予定していた大阪での夏期フィールドワークは台風上陸のため延期を余儀なくされた。また、ゼミ生間でのスケジュール調整が難航しながらもなんとか計画した、2024年2月5日（月）～7日（水）で予定していた大阪でのフィールドワークもゼミ生等の就職活動や研修等のやむを得ない理由で中止と判断せざるを得なかった。大変残念ではあったが、仕方のない判断であった。

上記のような理由で夏期・冬期フィールドワークは実施することができなかったが、1年間をかけて実施してきたインタビュー調査（オンラインを含む）を中心とするフィールドワークを通じて大変実りのある調査を実施し、その研究成果をゼミ報告書の形で結実してくれた。大変充実した1年間となった。

前期は、共通する問題関心をもとに「子ども班」「マイノリティ班」の2グループに分けて、それぞれのグループごとに研究計画を作成し、調査対象者を選定し、実際に調査対象者に調査依頼をしてインタビューを実行した。調査は2023年7月～12月下旬にかけて、各グループが自らのテーマに関連する分野における当事者や支援活動を行っているNPO法人等に対して実施した（今年度は夏期フィールドワークが台風で延期となったため、主にインタビュー調査は後期に実施した）。1年間を通じて、「子ども班」は3名の当事者に対してインテンシヴなオンラインインタビュー調査を実施した。「マイノリティ班」は2つの当事者を中心に運営されているNPO法人に対してインテンシヴなインタビュー調査を実施した。インタビュー調査は1回60分～90分程度のインタビューを行い、それらのインタビューを録音・録画した。調査後はインタビュー調査のデータのコーディング作業を行って、詳細かつ緻密な分析作業をできるだけ丁寧に行うようにした。特に、前期は緻密かつ詳細なリサーチデザインを作成することに力点を置いて進めた。

当ゼミの今年度のテーマは「地域における当事者の声と支援実践」である。各地域において困難を抱える人たちはいかに暮らしているのか、支援者は彼／女らをどのように支えているのかを分析した上で、それぞれの「地域」の差異を比較検討することで、「支援実践の場としての地域」を考察した。後期には、こうしたインタビューやフィールドワークを実施し、そこで収集したデータを分析し、考察を深めた。

後期は、各グループで前期に実施したフィールドワークやインタビューの結果を踏まえ（あるいは延期したインタビュー調査の計画をブラッシュアップしつつ）、新たに調査を設計し直し、更なるインタビューやフィールドワークを実施した。後期後半からはFLP報告書の作成を行うと同時に、2024年度にさらに本格的に展開する東京郊外調査プロジェクト都市郊外

(八王子市・多摩市・日野市などのみならず、東京都・神奈川県・埼玉県・千葉県などを含む)のフィールドワークについて検討した。

このようなインタビュー調査を中心とするフィールドワークを通じて、学生たちは当事者や支援者に何がどのように生じており、どのような困難や課題をもたらすかについて考える契機になったことは、これ以上のない学びになった。

学生たちは非常に熱心かつ緻密にインタビュー調査を中心とするフィールドワークに取り組んでくれたため、きわめて実りのある一年になった。2024年度に向けて更に本格的な調査プロジェクトの始動に向けた社会調査を行うことができたし、調査プロジェクト全体について学ぶこともできた。

#### <実態調査・見学調査・講演会>

2023年5月に新型コロナウイルス感染症が5類感染症に引き下げられたことから、対面授業はもちろんのこと、グループごとに定期的に調査を行い、コロナ禍前と同様、宿泊を伴うフィールドワークなどを計画できたのは大きな喜びであった。

しかしながら、8月16日(水)～18日(金)で予定していた大阪での夏期フィールドワークは台風上陸のため延期を余儀なくされた。また、ゼミ生間でのスケジュール調整が難航しながらもなんとか計画した、2024年2月5日(月)～7日(水)で予定していた大阪でのフィールドワークもゼミ生等の就職活動や研修などのやむを得ない理由で中止と判断せざるを得なかった。大変残念ではあったが、2024年度には(夏休み中のフィールドワークの場合には台風などで中止せざるを得ないことも想定し、予備日も作った上で)夏期フィールドワーク、冬期フィールドワークを実施するものとした。

他方で、こうした困難がありながらも、2024年2月には1年間をかけて行ってきたフィールドワークの成果を大変読み応えのある報告書にまとめてくれた。記して感謝したい。

## FLP演習C

### <テーマ>

現代日本社会において人びとが生きていく場所としての地域を考える

### <授業の概要>

現代日本社会においてどのように人びとは生きていくことが可能にする場所として、あるいはその逆に人びとが生きていく上での困難を生み出す場所として地域がある。その地域においてどのような仕組み（家族、福祉、医療、教育、労働、社会運動、産業など）によって人びとが生き延びていくことを可能にしたり、困難にしたりしているのかを探求する。

演習 B、演習 C では、一年間を通じて都市郊外（八王子市・多摩市・日野市などのみならず、東京都・神奈川県・埼玉県・千葉県などを含む）をフィールドにインテンシヴなフィールドワークを実施すると同時に、春・夏・冬の3回、全国各地のフィールドワークを行うことを通じて比較検討をしていく。

### <活動内容>

2023年5月に新型コロナウイルス感染症が5類感染症に引き下げられたことから、対面授業はもちろんのこと、グループごとに定期的に調査を行い、コロナ禍前と同様、宿泊を伴うフィールドワークなどを計画できたのは大きな喜びであった（2022年度にも夏期フィールドワークは実施したが、様々な制約を余儀なくされた）。

しかしながら、8月16日（水）～18日（金）で予定していた大阪での夏期フィールドワークは台風上陸のため延期を余儀なくされた。また、ゼミ生間でのスケジュール調整が難航しながらもなんとか計画した、2024年2月5日（月）～7日（水）で予定していた大阪でのフィールドワークもゼミ生等の就職活動や研修等のやむを得ない理由で中止と判断せざるを得なかった。大変残念ではあったが、仕方のない判断であった。

上記のような理由で夏期・冬期フィールドワークは実施することができなかったが、1年間をかけて実施してきたインタビュー調査（オンラインを含む）を中心とするフィールドワークを通じて大変実りのある調査を実施し、その研究成果をゼミ報告書の形で結実してくれた。大変充実した1年間となった。

前期は、共通する問題関心をもとに「子ども班」「マイノリティ班」の2グループに分けて、それぞれのグループごとに研究計画を作成し、調査対象者を選定し、実際に調査対象者に調査依頼をしてインタビューを実行した。調査は2023年7月～12月下旬にかけて、各グループが自らのテーマに関連する分野における当事者や支援活動を行っているNPO法人等に対して実施した（今年度は夏期フィールドワークが台風で延期となったため、主にインタビュー調査は後期に実施した）。1年間を通じて、「子ども班」は3名の当事者に対してインテンシヴなオンラインインタビュー調査を実施した。「マイノリティ班」は2つの当事者を中心に運営されているNPO法人に対してインテンシヴなインタビュー調査を実施した。インタビュー調査は1回60分～90分程度のインタビューを行い、それらのインタビューを録音・録画した。調査後はインタビュー調査のデータのコーディング作業を行って、詳細かつ緻密な分析作業をできるだけ丁寧に行うようにした。特に、前期は緻密かつ詳細なリサーチデザインを作成することに力点を置いて進めた。

当ゼミの今年度のテーマは「地域における当事者の声と支援実践」である。各地域において困難を抱える人たちはいかに暮らしているのか、支援者は彼／女らをどのように支えているのかを分析した上で、それぞれの「地域」の差異を比較検討することで、「支援実践の場としての地域」を考察した。後期には、こうしたインタビューやフィールドワークを実施し、そこで収集したデータを分析し、考察を深めた。

後期は、各グループで前期に実施したフィールドワークやインタビューの結果を踏まえ（あるいは延期したインタビュー調査の計画をブラッシュアップしつつ）、新たに調査を設計し直し、更なるインタビューやフィールドワークを実施した。後期後半からはFLP報告書の作成を行うと同時に、2024年度にさらに本格的に展開する東京郊外調査プロジェクト都市郊外

(八王子市・多摩市・日野市などのみならず、東京都・神奈川県・埼玉県・千葉県などを含む)のフィールドワークについて検討した。

このようなインタビュー調査を中心とするフィールドワークを通じて、学生たちは当事者や支援者に何がどのように生じており、どのような困難や課題をもたらすかについて考える契機になったことは、これ以上のない学びになった。

学生たちは非常に熱心かつ緻密にインタビュー調査を中心とするフィールドワークに取り組んでくれたため、きわめて実りのある一年になった。2024年度に向けて更に本格的な調査プロジェクトの始動に向けた社会調査を行うことができたし、調査プロジェクト全体について学ぶこともできた。

#### <実態調査・見学調査・講演会>

2023年5月に新型コロナウイルス感染症が5類感染症に引き下げられたことから、対面授業はもちろんのこと、グループごとに定期的に調査を行い、コロナ禍前と同様、宿泊を伴うフィールドワークなどを計画できたのは大きな喜びであった。

しかしながら、8月16日(水)～18日(金)で予定していた大阪での夏期フィールドワークは台風上陸のため延期を余儀なくされた。また、ゼミ生間でのスケジュール調整が難航しながらもなんとか計画した、2024年2月5日(月)～7日(水)で予定していた大阪でのフィールドワークもゼミ生等の就職活動や研修などのやむを得ない理由で中止と判断せざるを得なかった。大変残念ではあったが、2024年度には(夏休み中のフィールドワークの場合には台風などで中止せざるを得ないことも想定し、予備日も作った上で)夏期フィールドワーク、冬期フィールドワークを実施するものとした。

他方で、こうした困難がありながらも、2024年2月には1年間をかけて行ってきたフィールドワークの成果を大変読み応えのある報告書にまとめてくれた。記して感謝したい。

## (6) 新原 道信 (文学部・教授)

### FLP演習A・B

#### <テーマ>

地域に寄りそい、ひとにこころを寄せるフィールドワークと子どもたちが「生きやすい」コミュニティづくり

#### <授業の概要>

- ①ひとの「つながり」が希薄となりつつある地域社会において、地域に寄りそい、ひとにこころを寄せ、子どもたちが「ここで暮らしていきたい」と思えるようなコミュニティづくりをいかにしていくのか?——いま私たちが直面する地域社会の問題のほとんどは、地球規模となったグローバル社会の問題と結びついています。国際／国内と分けられないような惑星社会の問題に対して、どのような応答を試みたらよいのでしょうか。いまは亡きイタリアの社会学者メルッチは、「地政学的なブロックの間に依然として残っている亀裂、北と南との間のほとんど連結不可能なほどの裂け目、剥奪された人びとの間で鬱積している怒りの凄まじさ」を認めつつも、「存在しているものは何であれ、ただ存在するという理由のみによって静かに尊重されるようなテリトリー」を創ることに生涯を捧げました。新原ゼミは、この新たな社会構想の担い手となる“社会のオペレーター”——生活の場に居合わせ、ひとにこころを寄せ、声を聴き、要求の真意をつかみ、様々な「領域」を行き来し、〈ひとのつながりの新たなかたち〉を構想していくひと——の育成を目的としています。
- ②ゼミ生は、〈調査研究／教育／大学と地域の協業〉を実際に体験しつつ、“フィールドワークの力（自分で道を切り開き、大切なこと／出会うべきひとに出会い、他者とともに場を創る力）”を蓄えていきます。
  - (1)都市と地域の社会学を学びつつ、惑星社会の様々な場で起こっている開発・発展をめぐる問題が、私たちの身近な暮らしとどう関わっているのかを理解します。
  - (2)それと同時に、実際の地域に入らせてもらいます。2年次には、前期から夏休みの合宿にかけてフィールドワークの「技法・作法と倫理」「理論と方法」——生身の現実への理解力、フィールドへの入り方、ひととの接し方、関係のつくり方、所作、マナー、エチケットなど——を学び、サマースクールに参加、低関与型フィールドワークを体験します。後期以降は、サマースクールの成果をとりまとめ、3年次からは、他の新原ゼミ（院・学部・FLP 国際協力）の合同プロジェクトである「立川プロジェクト」を中心に、関与型フィールドワーク（参与観察）を実践し、4年次には個人のプロジェクトを立ち上げ実践することをめざします。ゼミ生有志の合同プロジェクトである「立川プロジェクト」は、院・学部・FLP（国際協力と地域公共）ゼミ有志で立川・砂川の公営団地や砂川地区の他の諸組織・団体（連合子供会、小中学校、児童館、児童養護施設など）や、被災地での活動に参加させていただいています。
  - (3)ゼミ運営とフィールドワークの計画立案・実施も含めてゼミ生主導で実行していきます。とりわけゼミの途中での留学や長期の海外フィールドワーク、国内での被災地ボランティアなどにチャレンジする学生を応援しています。立川・砂川など、ゼミとして続けてきた“コミュニティを基盤とする参与的調査研究 (Community-Based Participatory Research (CBPR))”は、同じ試みを現地で行っているイタリア、ブラジル、インドなどの大学とも知見を共有していきます。

#### <活動内容>

「新原ゼミ」は、文学部の学部と大学院、FLP「地域・公共マネジメント」と「国際協力」という、多様なゼミの総称です。4つのゼミには、これまで中央大学のほとんどすべての学部から多才な学生が集まり、社会学の理論やフィールドワークの方法、とりわけ“コミュニ

ティを基盤とする調査研究（Community Based Research (CBR)）”と“療法的でリフレクシブな調査研究（Therapeutic and Reflexive Research(T&R)）”を学んでいます。

フィールドワークは、文献から学ぶとともに、実際に身体をうごかし、生の声を聴くこと、〈あるき・みて・きいて・しらべ・ともに考え・かく〉ことを大切にする学問です。大学の外に出て、あらゆることに耳をすまし、出来る限りそれらを記憶・記録し、その意味を考え、調べ、ふりかえります。一つ一つのことを慎重に行い、地域で暮らす人たちの想いや歴史を丁寧に理解し、信頼関係を築きあげていくことを心がけています。

新原ゼミの特徴は、一人一人が「自分で道を切り開く」こと、そういうひとたちが「ともに場を創る」ところです。年間のスケジュールから毎回のゼミ、司会進行、記録まで、誰が何をやるのか、フィールドワークの成果をどうまとめていくのか、合宿は何のために行き、何をするのか——〈教えられたり指示されたりする前にまず自分で始めてみること〉、

〈チャレンジしたからこそ直面する「困難」や「危機」から学ぶこと〉を大切にして、毎年ゼロから、ゼミ生皆で話し合っ方針を決めてきました。

新原ゼミ A 生は、駒ヶ根市のサマースクールの事前調査、フィールドワーク、事後調査をメインの活動としました。「子どもたちが生きやすいコミュニティづくりと地域に寄り添い、人に心を寄せるフィールドワーク」をテーマとして、駒ヶ根市の教育、移住に焦点をあて、関係施設にヒアリング、基本データや地理的状況について詳しく調べ、期末成果報告書を取りまとめました。

B 生は、昨年の八王子市で調査の成果をふりかえりました。今年度は、多摩ニュータウンをフィールドとして、諏訪・永山団地、落合団地でフィールドワークをおこない、多摩市のランタン・フェスティバルの運営にも参加し理解を深める取り組みをし、期末成果報告書を取りまとめました。

## FLP演習C

### <テーマ>

地域に寄りそい、ひとにこころを寄せるフィールドワークと子どもたちが「生きやすい」コミュニティづくり

### <授業の概要>

①ひとの「つながり」が希薄となりつつある地域社会において、地域に寄りそい、ひとにこころを寄せ、子どもたちが「ここで暮らしていきたい」と思えるようなコミュニティづくりをいかにしていくのか？——いま私たちが直面する地域社会の問題のほとんどは、地球規模となったグローバル社会の問題と結びついています。国際／国内と分けられないような惑星社会の問題に対して、どのような応答を試みたらよいのでしょうか。いまは亡きイタリアの社会学者メルッチは、「地政学的なブロックの間に依然として残っている亀裂、北と南との間のほとんど連結不可能なほどの裂け目、剥奪された人びとの間で鬱積している怒りの凄まじさ」を認めつつも、「存在しているものは何であれ、ただ存在するという理由のみによって静かに尊重されるようなテリトリー」を創ることに生涯を捧げました。新原ゼミは、この新たな社会構想の担い手となる“社会のオペレーター”——生活の場に居合わせ、ひとにこころを寄せ、声を聴き、要求の真意をつかみ、様々な「領域」を行き来し、〈ひとのつながりの新たなかたち〉を構想していくひと——の育成を目的としています。

②ゼミ生は、〈調査研究／教育／大学と地域の協業〉を実際に体験しつつ、“フィールドワークの力（自分で道を切り開き、大切なこと／出会うべきひとに出会い、他者とともに場を創る力）”を蓄えていきます。

- (1)都市と地域の社会学を学びつつ、惑星社会の様々な場で起こっている開発・発展をめぐる問題が、私たちの身近な暮らしとどう関わっているのかを理解します。
- (2)それと同時に、実際の地域に入らせてもらいます。2年次には、前期から夏休みの合宿にかけてフィールドワークの「技法・作法と倫理」「理論と方法」——生身の現実への理解力、フィールドへの入り方、ひととの接し方、関係のつくり方、所作、マナー、エチケットなど——を学び、サマースクールに参加、低関与型フィールドワークを体験します。後期以降は、サマースクールの成果をとりまとめ、3年次からは、他の新原ゼミ（院・学部・FLP 国際協力）の合同プロジェクトである「立川プロジェクト」を中心に、関与型フィールドワーク（参与観察）を実践し、4年次には個人のプロジェクトを立ち上げ実践することをめざします。ゼミ生有志の合同プロジェクトである「立川プロジェクト」は、院・学部・FLP（国際協力と地域・公共）ゼミ有志で立川・砂川の公営団地や砂川地区の他の諸組織・団体（連合子供会、小中学校、児童館、児童養護施設など）や、被災地での活動に参加させていただいています。
- (3)ゼミ運営とフィールドワークの計画立案・実施も含めてゼミ生主導で実行していきます。とりわけゼミの途中での留学や長期の海外フィールドワーク、国内での被災地ボランティアなどにチャレンジする学生を応援しています。立川・砂川など、ゼミとして続けてきた“コミュニティを基盤とする参与的調査研究 (Community-Based Participatory Research (CBPR))”は、同じ試みを現地で行っているイタリア、ブラジル、インドなどの大学とも知見を共有していきます。

### <活動内容>

「新原ゼミ」は、文学部の学部と大学院、FLP「地域・公共マネジメント」と「国際協力」という、多様なゼミの総称です。4つのゼミには、これまで中央大学のほとんどすべての学部から多才な学生が集まり、社会学の理論やフィールドワークの方法、とりわけ“コミュニ

ティを基盤とする調査研究（Community Based Research (CBR)）”と“療法的でリフレクシヴな調査研究（Therapeutic and Reflexive Research(T&R)）”を学んでいます。

フィールドワークは、文献から学ぶとともに、実際に身体をうごかし、生の声を聴くこと、〈あるき・みて・きいて・しらべ・ともに考え・かく〉ことを大切にする学問です。大学の外に出て、あらゆることに耳をすまし、出来る限りそれらを記憶・記録し、その意味を考え、調べ、ふりかえります。一つ一つのことを慎重に行い、地域で暮らす人たちの想いや歴史を丁寧に理解し、信頼関係を築きあげていくことを心がけています。

新原ゼミの特徴は、一人一人が「自分で道を切り開く」こと、そういうひとたちが「ともに場を創る」ところです。年間のスケジュールから毎回のゼミ、司会進行、記録まで、誰が何をやるのか、フィールドワークの成果をどうまとめていくのか、合宿は何のために行き、何をするのか——〈教えられたり指示されたりする前にまず自分で始めてみること〉、〈チャレンジしたからこそ直面する「困難」や「危機」から学ぶこと〉を大切にして、毎年ゼロから、ゼミ生皆で話し合っ方針を決めてきました。

新原ゼミC生は、三年間の学びの集大成として、『みんなが暮らしやすく満足できるまちづくりの長期的な実現に向けて～新原ゼミとして多摩市に関わった経験を踏まえて～』と題する期末成果報告書（総頁数 56 頁）を完成させました。

初年度のA生次における活動のひとつであるサマースクールに向けた政策提言をゴールとするのではなく、その後も長期的に多摩市のまちづくりに携わってきました。今年度は、多摩市との間で、独自の交渉を行い、昨年度に着手したランタン・フェスティバルとのかかわりを、より参与的なものへとバージョンアップしました。その結果、ランタン・フェスティバルの企画運営にも、深くかかわることを達成しました。この試みは、ゼミで学んできた“コミュニティを基盤とする参与的調査研究(Community-Based Participatory Research(CBPR))”の実践的な学びとなりました。

C生は、まちづくりで市民と行政をつなげる「仲介者」の存在に着目し、大学生による〈調査研究／教育／大学と地域の協業〉を実践しました。これはまた、ゼミの目標である“社会のオペレーター（生活の場に居合わせ、ひとにこころを寄せ、声を聴き、要求の真意をつかみ、様々な「領域」を行き来し、〈ひとのつながりの新たなかたち〉を構想していくひと）”の育成とつながっています。

## (7) 川崎 一泰 (総合政策学部・教授)

### FLP演習A・B・C

#### <テーマ>

地域計画のための分析手法

#### <授業の概要>

この科目では地域を設定し、問題発見をし、課題解決のための政策提言を行うことを最終目標とする。そのためのデータ収集、データ処理、分析などの座学にはじまり、現地調査などのフィールドワークや行政にヒアリング調査など多角的に学習する。

#### <活動内容>

川崎ゼミは、駒ヶ根市におけるサマースクールに参加するため、文献調査からはじめ、データ分析等を通じて、地域課題の発見を試みた。関連する街づくりの事例を調査し、併せて制度研究も行い、アイデアの取りまとめを行った。春学期は総合計画を参考にしつつ、地域課題の把握と政策のポイントを把握した。また、都市計画や地区計画などの手法を学びつつ、民間投資による街並み形成や商業的価値についてディスカッションした。夏休みのサマースクールで現地を視察しつつ、ヒアリング等を通じて、地域課題を把握するとともに、地域の資源の確認も行った。秋学期はメンバーでディスカッションしつつ、具体的な政策提案のための絞り込みを行った。

今年度は薄利多売モデルの限界を把握し、少量で高品質な商品をベースにプレミアム消費を促す提案を行った。資料をベースにリノベーションの効果、都市計画、地区計画、再開発手法などの制度を学びつつ、それを活用することによってどのような効果があるかを座学で学習しつつ、実際に街歩きをしながら、政策効果を考える機会を設けた。

なお、学生たちの具体的な成果はサマースクール報告書に収録されているので、そちらを参照されたい。

#### <実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：B・C

実施日：2023年8月22日(火)～2023年8月24日(木)

実施都市：広島県江田島市、広島市

実施場所：江田島市役所、旧海軍兵学校、宮島等

実施内容：歴史的建造物利用と建造物を活用した観光開発、景観維持のための制度の確認と実態調査など

成果：歴史的景観を活用しつつ、人を呼び込む現場の状況を把握した。座学で学んだ制度が活用され、どのような景観が形成されているかを見学した。

対象演習：A・B・C

実施日：2023年9月4日(月)～2023年9月6日(水)

実施都市：長野県駒ヶ根市

実施場所：駒ヶ根市

実施内容：市職員と政策課題についてディスカッションし、中心市街地、地産地消レストラン経営者、ごま油生産者等へのヒアリングを実施した。

成果：地域の置かれている現状を把握し、それぞれの方々が抱えている課題を聞き、政策的対応可能性を考えるきっかけとなった。

## (8) 小林 勉 (総合政策学部・教授)

### FLP演習A

#### <テーマ>

スポーツによる地域活性化の可能性に関する研究

#### <授業の概要>

Jリーグのホームタウンの事例にみられるように、スポーツによって地域が大きな盛り上がりを見せるなど、近年、「地域」と「スポーツ」が結び付けられて論じられることが多くなってきています。こうした捉えられ方はいつ頃から、どのような経緯の中でなされてきたのでしょうか。本授業ではそうした経緯について理解を深めながら、スポーツによる地域活性化の可能性について検討していきます。それと同時に、「スポーツの素晴らしさ」だけを焦点化するのではなく、地域活性化にスポーツを結びつけて考えようとする際の様々な課題についても検証します。

地域で展開されるスポーツの実情を踏まえながら、「地域とスポーツ」の関係について多角的な観点から検討できるようになることが、本授業の大きな目標です。

#### <活動内容>

FLP 小林ゼミ演習 A では、①駒ヶ根市に向けた政策提言、②Jリーグクラブとの連携イベントの運営サポート、③Jリーグクラブとの連携プロジェクトの運営サポートを行った。

まず、①「駒ヶ根市に向けた政策提言」では、9月に訪れた長野県駒ヶ根市において、どのような現状か、何が課題かを駒ヶ根市役所へのヒアリング調査や現地でのフィールドワークによって明らかにし、得た情報から「訪日外国人に向けた観光政策」をテーマに、スポーツを活用しつつ経済活動活性化を促す政策提言を行った。

次に、②「Jリーグクラブとの連携イベントの運営サポート」では、6月に行われた明治安田生命秋田支社ウォーキングサッカー教室を企画し運営した。このプロジェクトは明治安田生命秋田支社とブラウブリッツ秋田の提携によるものである。秋田の皆様の毎日に、「スポーツを通じてちょっとした福をプラスして欲しい」という想いのもと、「元気な街、秋田」の構築を目指してこのような企画の実施に至った。

③「Jリーグクラブとの連携プロジェクトの運営サポート」では、Jリーグクラブのブラウブリッツ秋田と本ゼミが10年間にわたって実施してきた共同プロジェクトであり、9月のホームゲーム1試合のプロデュースを行った。プロジェクトの内容は、ミッションサッカー大会開催、巨大エコキャップアート作成、ハーフタイムに映像公開、夢授業の実施、マッチデープログラム作成、福たすブースの実施、福たすTシャツ作成等である。演習Aでは、それらのコンテンツの運営サポートを行った。

#### <実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：A・B

実施日：2023年6月8日(木)～2023年6月12日(月)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：ソユースタジアム

実施内容：Jリーグクラブのブラウブリッツ秋田と連携し、試合前に開催されたウォーキングサッカー大会の運営サポートを行った。

成果：秋田市やスタジアムの雰囲気を実際に感じることができ、老若男女問わずブラウブリッツ秋田のファン・サポーターや選手と触れ合うことができる貴重な機会となった。

対象演習：A・B・C

実施日：2023年9月12日(火)～2023年9月17日(日)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：ソユースタジアム

実施内容：Jリーグクラブのブラウブリッツ秋田と連携し、ホームゲームのプロデュースを行った。具体的には、年齢や性別を問わず参加可能な「ミッションサッカー大会」の運営支援や企画補助、「巨大エコキャップアート」の展示支援、複数の「福たすブース」の運営補助、スタジアム来訪者へ渡す「マッチデープログラム」の作成などを行った。

成 果：実際のJリーグクラブと連携し、プロサッカーリーグの公式戦をプロデュースする支援をすることで、一つの公式戦が運営されるのに必要な要素がいかにかに多いのかを感じることができた。プロジェクトを通して、ファン・サポーターや選手、クラブ職員の方々と関わることから、スポーツを通じた地域貢献の可能性を見いだすことができ、来年度のプロジェクトに向けて貴重な機会となった。

## FLP演習B

### <テーマ>

スポーツによる地域活性化の可能性に関する研究

### <授業の概要>

Jリーグのホームタウンの事例にみられるように、スポーツによって地域が大きな盛り上がりを見せるなど、近年、「地域」と「スポーツ」が結び付けられて論じられることが多くなっています。こうした捉えられ方はいつ頃から、どのような経緯の中でなされてきたのでしょうか。本授業ではそうした経緯について理解を深めながら、スポーツによる地域活性化の可能性について検討していきます。それと同時に、「スポーツの素晴らしさ」だけを焦点化するのではなく、地域活性化にスポーツを結びつけて考えようとする際の様々な課題についても検証します。

地域で展開されるスポーツの実情を踏まえながら、「地域とスポーツ」の関係について多角的な観点から検討できるようになることが、本授業の大きな目標です。

### <活動内容>

小林ゼミは、Jリーグクラブとの共同プロジェクトである「福+プロジェクト」の企画運営を中心に、以下のような活動を行った。

#### 1. ビーサポーターズ

サントリーウエルネス主催の【Be supporters!】と連携し、高齢者の方々の日常にサッカーを通してちょっとしたワクワクを感じてもらおう企画を行なった。ブラウブリッツ秋田を幅広い世代の方々に知ってもらおうとともに、世代を越えた交流の輪を広げることもできた。

#### 2. ミッションサッカー

走らないサッカーである「ウォーキングサッカー」にゼミ生で考案した独自のルールを加えた「ミッションサッカー」という新しいスポーツを通じて、多世代間のコミュニケーション創出を図る企画を行なった。老若男女を問わず参加者同士のコミュニケーションを創出することができた。

#### 3. エコキャップチャレンジ

SDGs への理解を促す活動の一環として、中央大学とブラウブリッツ秋田のホームゲームでペットボトルキャップの回収を行い、ブラウブリッツ秋田のマスコットである「ブラウゴン」をモチーフにしたペットボトルアートを作成した。完成したアートは、ブラウブリッツ秋田ホームゲームにて展示され、多くのサポーターらが記念写真を撮影したりするなど、このチャレンジ活動を通じてSDGs への関心を高めることに貢献した。

#### 4. 記念動画

プロジェクト当日に先駆けて行った企画の様子を一つの動画にまとめあげ、ブラウブリッツ秋田のホームゲーム当日のハーフタイムにスタンドのビックスクリーンにて上映することで、本プロジェクトのPR活動を行なった。身近なスポーツを通して、その工夫次第で多様な人が楽しめる、社会課題の解決に貢献でき、多くの繋がりを創出しうることの可能性をスタジアムに観戦に来ていた来場者全体にPRすることができた。

#### 5. 夢授業

ノースアジア大学明桜高等学校の学生に向けて、夢の重要性や夢や目標への様々な追いかけ方があることを伝える参加型講義を実施した。ブラウブリッツ秋田の現役選手およびクラブスタッフの方に講師として招聘し、若者が夢を追いかけるきっかけ作りや将来への希望を秋田の高校生たちに伝えることができた。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：B

実施日：2023年5月27日(土)～2023年5月29日(月)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：ソユースタジアム

実施内容：ブラウブリッツ秋田のホームゲームの準備、試合運営に携わった他、6月実施のウォーキングサッカー大会に向けた下見を行った。またプロジェクト実施に向けて、関係機関とミーティングを行った。

成果：試合日のスタジアムやスタッフの様子を肌で感じることができた。またクラブスタッフと初めて面会し、企画立案に向けてコミュニケーションを図ることができた。

対象演習：A・B

実施日：2023年6月8日(木)～2023年6月12日(月)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：ソユースタジアム

実施内容：ブラウブリッツ秋田のホームゲームの前座として、多世代交流が図れるウォーキングサッカーを実施。また、中央大学学会秋田県支部定期総会への参加で福たすプロジェクトの認知度を広める活動を行なった。

成果：ウォーキングサッカーでは子どもから高齢者までの老若男女が参加し、多くのコミュニケーション創出と笑顔を生み出すことができた。中央大学学会秋田県支部定期総会では、福たすプロジェクトの認知度を広めることができた。

対象演習：B

実施日：2023年6月23日(金)～2023年6月25日(日)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：ソユースタジアム

実施内容：エコキャップチャレンジのアート制作に向けて、ソユースタジアムでペットボトルキャップの回収を実施した。また、ミッションサッカー大会開催に向けて、現地のサポーターを対象に広報活動を実施した。

成果：現地で直接サポーターの方や運営スタッフの方と意見交換をしたことで、当日までに解決すべき課題や今後の企画運営に必要な情報を得ることができた。

対象演習：B

実施日：2023年7月5日(水)～2023年7月8日(土)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：株式会社ブラウブリッツ秋田事務所・他

実施内容：プロジェクト実施にあたり、関係機関に対して挨拶及びスポンサーシップ広報活動を行なった。(主に中央大学学会秋田県支部定期総会の方々)

成果：本年度は、中央大学学会秋田県支部定期総会に参加したこともあり、新規の協賛メンバーを開拓することができた。

対象演習：B

実施日：2023年8月5日(土)～2023年8月6日(日)

実施都市：静岡県賀茂郡河津町

実施場所：NPO法人あおぞらビレッジ

実施内容：静岡県賀茂郡河津町にて開催されたNPO法人あおぞらビレッジによるあおぞらキャンプの場において、ミッションサッカーのトライアルを行った。

成 果：子供たちを対象にトライアルを実施できたことで、ルールの複雑さ、ルール説明の長さ、難易度が高すぎて楽しめない人などの参加者たちの実際の反応を確認することができた。それらの問題点が浮き彫りになったことで、今年度の実施予定の新たなコンテンツに対して多くの課題を整理することができた。

対象演習：B

実施日：2023年8月6日(日)～2023年8月10日(木)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：株式会社ブラウブリッツ秋田事務所・他

実施内容：ビーサポーターズ秋田県内施設訪問、事務所での準備等

成 果：ビーサポーターズ企画に協力している各施設を訪問し、応援グッズ作成や試合応援を行ったことで、入居者の方々、スタッフの方々と交流をすることができた。また、ブラウブリッツ事務所にて、次回訪問予定の施設に向けての準備や、プロジェクト本番に向けた計画立て・準備を行うことができた。

対象演習：B

実施日：2023年8月12日(土)～2023年8月19日(土)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：株式会社ブラウブリッツ秋田事務所・他

実施内容：プロジェクト実施に向けて、スタジアムの備品を確認。福たすTシャツの発注のため、ブラウブリッツ秋田のクラブスタッフの方との打ち合わせを実施した。加えてビーサポーターズ企画の一環で高齢者施設訪問をし、施設入居者らと共に試合応援を行なった。

成 果：プロジェクト当日に使用する看板などの資材を確保することができ、当日設置するブースの具体的なイメージを高めることができた。また福たすTシャツの1次発注を完了し、オンライン販売に着手することができた。ビーサポーターズの企画では、その様子を地元新聞に取り上げてもらい、本プロジェクトの広報活動を行なった。

対象演習：B

実施日：2023年8月26日(土)～2023年8月29日(火)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：ソユースタジアム・他

実施内容：Jリーグクラブであるブラウブリッツ秋田と連携し、県内の高校であるノースアジア大学明桜高等学校にて、高校生の進路開拓における可能性の授業(以下、夢授業)を行った。夢授業では明桜高等学校男女サッカー部に対して、ブラウブリッツ秋田のメンバーである飯尾選手と松田主務からどういった背景の元に今の就職先に着いたのか、また夢を掴めた理由はどういったものなのかについて、インタビュー形式で授業を行った。

成 果：授業後、高校生に授業に対しての感想をアンケート用紙に記入してもらい、「自分の夢を叶えるために、より一層日々の生活から意識していきたい」「自分はサッカー選手という夢は諦めてしまったが、サッカーに携わる仕事がしたいと新たな夢を持つことができた」など、この活動によって高校生の進路選択に関するビジョンに対して一定のインパクトをもたらすことができたとともに、学生ら自身の進路開拓への考え方にも一定の変化をもたらすことができた。

対象演習：B

実施日：2023年9月2日(土)～2023年9月5日(火)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：ソユースタジアム・他

実施内容：引き続きソユースタジアムでペットボトルキャップの回収を実施し、それを活用したアートの制作を進めた。また、ビーサポーターズ企画に協力してくれた施設へブラウブリッツ秋田の選手とともに足を運び、施設の高齢者の方々とグッズの作成、試合観戦を行った。

成 果：サポーターの方々と交流する中で、福たすプロジェクトを秋田県の多くの方に認知してもらっていることを肌で感じさせることができた。また、一連の様子は秋田のテレビ局に取り上げられ、それへの対応を通じてメディア対応のスキルを向上させることができた。

対象演習：A・B・C

実施日：2023年9月12日(火)～2023年9月17日(日)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：ソユースタジアム

実施内容：ソユースタジアムやブラウブリッツ秋田事務所にて、ブラウブリッツ秋田のクラブスタッフの方やA生～C生が協働し、プロジェクト当日に向けた最終準備を行った。

成 果：プロジェクト当日まで約1年間進めてきた企画を実施し、サポーターの方々と秋田の方々にプロジェクトの目標である「笑顔と福」を届けることができたとともに、スポーツを通じた地域活性化の可能性を多角的に追及することができた。

実施日：2023年10月25日(水)～2023年10月27日(金)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：ソユースタジアム

実施内容：ソユースタジアムにて、福たすプロジェクトを支援してくれた関係者らに対して、プロジェクト全体を通じた報告会を実施し、今年度の活動を総括した。

成 果：支援者らに福たすプロジェクトの全体報告をすることで、今年度の活動を総括することができ、次年度への課題を整理することができた。

## FLP演習C

### <テーマ>

スポーツによる地域活性化の可能性に関する研究

### <授業の概要>

Jリーグのホームタウンの事例にみられるように、スポーツによって地域が大きな盛り上がりを見せるなど、近年、「地域」と「スポーツ」が結び付けられて論じられることが多くなっています。こうした捉えられ方はいつ頃から、どのような経緯の中でなされてきたのでしょうか。本授業ではそうした経緯について理解を深めながら、スポーツによる地域活性化の可能性について検討していきます。それと同時に、「スポーツの素晴らしさ」だけを焦点化するのではなく、地域活性化にスポーツを結びつけて考えようとする際の様々な課題についても検証します。

地域で展開されるスポーツの実情を踏まえながら、「地域とスポーツ」の関係について多角的な観点から検討できるようになることが、本授業の大きな目標です。

### <活動内容>

小林ゼミ演習Cでは、演習A・Bで展開される秋田県Jリーグクラブとの連携プロジェクトの準備・運営サポートを行った。

秋田県Jリーグクラブとの連携プロジェクトは、ブラウブリッツ秋田と本ゼミが10年間にわたり実施してきた共同プロジェクトである。プロジェクトに先立って行われた「ウォーキングサッカー教室」および、演習Bを中心に企画立案されたプロジェクト当日の6つのコンテンツに対して、準備段階から実施当日の運営に至るまでの協力支援活動を行った。

コロナ禍における過去2度のオンライン開催を経て3年ぶりに秋田県現地での開催を実現した昨年度の経験をもとに、同様の企画を実施した際の学びを活かしながら、現地のプロジェクト支援者との連携や実際のイベント運営などについて後輩ゼミ生らのサポートをすることで、10周年の節目となる今年度のプロジェクト実施を支援した。

### <実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：A・B・C

実施日：2023年9月12日(火)～2023年9月17日(日)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：ソユースタジアム

実施内容：Jリーグクラブのブラウブリッツ秋田と連携し、ホームゲームのプロデュースを行った。具体的には、高齢化率が最も高い秋田での健康増進を目的とした「ミッションサッカー」、応援を通じて高齢者の方と世代を超えたコミュニケーションの輪を広げることを目的とした【Be supporters!】、SDGsの内容理解を促すことを目的とした「エコキャップチャレンジ」、福たすプロジェクト10周年を記念し、福たすプロジェクトおよびブラウブリッツ秋田の歴史を感じて頂くことを目的とした「福たすブース」等の運営、サポートを実施した。

成 果：学生では経験できないようなプロスポーツの試合運営を実際に経験することで、マネジメントの難しさを感じるだけでなく、企画力や実行力を身に付けることができた。また、スポーツを通じた社会貢献活動の可能性について検討することができた。

## (9) 堤 和通 (総合政策学部・教授)

### FLP演習A

#### <テーマ>

地域社会における社会安全政策

#### <授業の概要>

前期はサマースクールに向けての準備を、後期はサマースクールの成果の取りまとめを中心に授業を行った。サマースクールの行き先である長野県駒ヶ根市について、市の行動計画をゼミ生で共有し、ゼミ生それぞれの関心を披瀝したうえで、SNSを通じた駒ヶ根市の魅力発信を調査テーマとすることにした。事前学習を始めた時期に確認した駒ヶ根市のSNSの運用状況を踏まえ、SNSを活用した魅力発信の余地が大きいと考えられたこと、SNSの活用が市の課題に挙げられていること、人口減少の打開策には市の魅力を知ってもらう必要があることがテーマ選定の理由であった。その後、SNSの利用について、各種の利用層などの特徴やSNSマーケティングなどの調査を進めるとともに、駒ヶ根市へのヒアリング先とヒアリング事項の提示、市からのフィードバックを受けたヒアリング事項の検討を重ね、サマースクールに参加した。サマースクール時には、その時点での駒ヶ根市のSNSの運用状況を確認し、ヒアリングを行うとともに、市のアカウントからの情報発信を行う機会を得た。後期は、サマースクールで市側から得たコメントを一つの参考にして、期末成果報告会に向け準備を進めた。

次年度以降の個別の調査研究に備え、特に後期には、ゼミ生が各自の関心に沿った調査を始め、数回の報告を行った。具体的には、包摂社会の構築という関心から、バリアフリーの取り組みに関する調査を始めた。また、支援の仕組みと実践という関心から、高齢者犯罪の問題を取り上げた。犯罪白書の特集号で現状の把握を始め、犯罪学を初めとする関連の学術研究で参考になるものを調べた。

担当教員からは、ゼミのテーマである社会安全政策論の問題意識とアプローチについて基礎的な解説を行った。

#### <活動内容>

ゼミがテーマとする社会安全政策については、担当教員が参加する学会部会（警察政策学会社会安全政策教育研究部会）が複数の大学学部の卒業発表の報告会を開催している。今年度は、ゼミのC生が在籍しておらず、ゼミからの卒業発表はなかったが、報告会（2024年2月2日）に参加した。